別府大学とこれからの社会[1]

文学部人間関係学科
教授　篠藤　明徳

はじめに

別府大学では、地域に開かれた大学として、長年にわたり「公開講座」を実施してきました。私は、その責任者として、この４年間、「学問・教育、人生を語る」と題し、別府大学の教員が自由に語る連続講義を行ってきました。述べ約50人になる教員が、これまで取り組んできた研究、学生教育とともに、人生を振り返ってきたわけです。小さなキャンパスではありますが、３学部あり、人文、社会、自然科学の各分野の研究者が集っています。また、長い間実務に携わってきた専門家も含まれ、実に多様な教員がいることをご理解いただけたでしょう。

こうした企画を意図した理由があります。私がドイツから帰国し、別府に戻ってきたとき、別府市役所で国際交流に関する会議がありました。当時、立命館アジア太平洋大学（APU）が丁度開学するときでしたので、大学との連携についても語られたのですが、市の担当職員は大学の内容、つまり、そこに集う教員の研究などは全く知りませんでした。大学とは広大なキャンパスと建物、そして、そこに集う多くの学生を意味している感がありました。こうした外形的なもののみに関心を寄せるのは、なにも別府市ばかりではありません。他の自治体でも同様です。しかし、大学の本質は、研究の自由が保障された教員共同体とそこで研究の仕方を学ぶ教育であるはずです。そこで、公開講座を通して、別府大学の“内容”をストレートに体験できるようにしたかったわけです。

本稿では、そうした公開講座を踏まえ、別府大学の意義について私なりに考えてみたいと思っています。

佐藤義詮記念館

1　大学の変化

現在の学問

大学は、「学問の府」「真理の府」と呼ばれてきましたが、かつては非常に少数の人々が知的探究をする場でした。別府大学の校是も「真理はわれ

[1] 本稿は、2017年１月10日に行われた公開講座の最終講義を修正・加筆したものである。

らを自由にする」というものです。

ところで、現在の学問は非常に細分化され、それぞれの学問ディシプリンに基づき、専門的概念や研究方法等が蓄積されています。そして、それぞれの学問共同体の中で、厳密な方法と論理によって、研究の妥当性が議論され、多くの賛同を得たものが「定説」として暫定的に合意されます。従って、その意味で、大学は「普遍的真理」に到達する場ではありませんし、ましてや、「普遍的真理」が存在する場でもありません。細分化された厳密な方法とそれに基づく真摯な相互批判が存在する場です。

現代における大学

現在は、２人に１人が４年制大学に進学しています。短期大学や専門学校を加えると80％近くの人々が高校を卒業した後も更に学んでいます。こうした高学歴化は、世界の先進国共通の現象です。そして、ほとんどの学生は卒業後、実社会において会社等に就職します。給与をもらって生活することは、現代では全く普通に感じられますが、戦後、２人に１人が１次産業に従事し、また、２次産業、３次産業の分野でも自営業の割合が多かったことを考えると、こうした現象は高度成長以降の新しいものであると言えます。現在学んでいる学生の親たちの世代において初めて、“当たり前”になったのです。

就職できるスキルの習得

従って、大学で学ぶ第１の意義は、就職できるスキルを身につけるものだと、多くの人々は考え始めています。文部科学省の議論などでも、グローバル大学とローカル大学というように、大学の使命を分類しています。ユニヴァース（普遍）を語源とするユニヴァーシティ（大学）がローカルというのは何とも語義矛盾という感もありますが、大学の変容を考えれば、頷くことができます。こうした議論を引っ張ってきたひとりである冨山和彦さんは、経済もグローバルな経済とローカルな経済があり、地方の大学はローカル経済に貢献できる人材養成に集中すべきだと言っていますし、こうした脈略で、地方創生における大学の役割も語られています(増田、冨山、P64～P84)。

確かに、４年間という長期の時間と、多額な学費、生活費を使って大学生活が保障され、卒業後、就職するわけですから、多くの保護者や学生にとって、こうした就職のためのスキルの習得は切実な願いです。別府大学でも、来年度から始まる５か年計画で、「100％の就職を実現する」という目標を立て、そのための「人間的成長」をする教育を実現するとしています。「人間的成長」とは、知力、対人力、自律力、徳力、創造力を意味します。その目標に向かって、細かなカリキュラムを構築し、毎年、PDCA サイクルによって絶えず改善、実施をしていくわけです。

大学は、先述のように、多額のお金と時間をいただいて運営しているわけですから、こうした要望に誠実に応えなければいけません。曖昧な、自己満足的な内容で許されるはずがありません。厳しい社会で生き抜くための力、スキルを学生は身につけなければならないでしょう。

この場合、これまでの大学概念を一端取り払って、主に18歳から22歳の人々を対象とし、その後は社会で働く人々のための学校教育として、考え直すことが必要なのでしょう。その時、教員資格も問われるかもしれません。もっと実務に精通した人々の力も必要でしょうし、授業カリキュラムもその観点から再考されるべきでしょう。

② 私の視点

ドイツでの体験

こうした現実を踏まえながらも、本日は、別の角度から少し考えたいと思います。そのためには、「私の視点」を説明する必要があります。

私は、多くの大学教員が大学院で研究を行ってきたのと異なり、日本の大学の学部で学んだあと、ドイツの大学で学び、その後、ドイツで自営業を始めました。いろいろな仕事をしましたが、10年間近くドイツのバーデン・ビュルテンベルク州の経済省から委託を受け、日本向けの PR 誌を制作し、コンサルタントをしていました。

私が渡独した時代は大変興味深い時で、日本のメーカーが海外に直接進出する時期でした。日本

を代表するトヨタもそうです。しかし、同社のドイツ支社は大変苦戦をしていまして、初めの何代かの支社長は、労働裁判等で苦戦を余儀なくされていました。私がお会いした支社長は、そうした経験を踏まえ、「これからは腰を据えて、まず、ドイツ社会を知ることから始める」と言っていました。大トヨタでもそうだったわけです。日本企業がグローバル化し始めた時だったのでしょう。現在では、ラーメン店を展開する企業もグローバル戦略を持っていますね。大変な違いです。日本経済もどんどんグローバル・ノウハウを蓄積していったのです。企業内人事でも外国人が多くなり、また、会話も英語を使用する例が増えてきています。こうして蓄積された企業のグローバル化は後戻りするものではありません。

ドイツの州経済省でも、グローバルな経済戦略を話していました。レストラン、通訳・法律等のサービスを付設したジャーマン・センターが横浜市に設立されたのもその時期です。インドのムンバイを中心としたシリコン・エリアでIT技術者を雇用しても月給数万円という話が当時ありました。もちろん、皆英語を話します。こうして国際分業がどんどん進んでいく様子を目の当たりにしたわけです。労働のグローバル分業の結果、先進諸国での失業が大きな問題になってきました。ヨーロッパ先進国における、特に、若者の失業は25%に及ぶ国々もあり、大問題となってきました。

当時、シリコン・アイランドという構想で、大分県でも国東半島等にいろいろなIT企業が誘致されていました。しかし、先ほどのインドの例などのように、地方であったとしてもその人件費が国際分業の関係で比較優位を保てるのか、と当時私は考えていました。

経済・技術の変化

日本は高度成長期、完全雇用を実現し「一億総中流」と言われる社会を作ってきました。しかし、その後、低成長期に入り、特にバブル崩壊後、1990年くらいから全く成長しない経済となりました。非正規雇用、格差社会が大きな問題になっています。こうした問題は、しかし、世界の先進諸国に共通しています。工場のオートメーション化から始まり、IT化の進展に伴う事務の合理化もどんどん進んできた結果です。また、先ほど述べたグローバル分業の影響ともいえます。その結果、高度専門教育の必要が言われますが、IT化を見ても、ソフト開発等はごく一部の人々によって担われていますので、国民全体の仕事を創出することはできません。

最近は、人工知能等の驚異的発展が社会全体を革命的に変えるだろうとも言われています。ある未来学者は、「2045年には、人間が車を運転するのは違法になる」と言います。つまり、人間は過ちを犯す確率が高いので、全ては人工知能に任せる方が安全であるというわけです。また、東大を受験する人工知能開発を主導した新井紀子教授（国立情報学研究）は、「2030年、日本のホワイトカラー労働者1600万人のうち、半数は人工知能によって失業する」とも言っています（原、2017年）。

指数関数的に進歩する技術発展について、「これから数十年のうちに、情報テクノロジー（IT）が、人間の知識や技量をすべて包含し、ついには、人間の脳に備わったパターン認識や、問題解決能力や、感情や道徳に関わる知能すらも取り込むようになる」（カーツワイル、P13）と論ずる人もいます。

こうした未来予測がどこまであたるかはわかりませんが、そのような激変する技術革新の時代に突入しているのは間違いなさそうです。

これからの社会

近代社会を特徴づけている一つが、“貨幣の万能化”です。分業化した市場の中で、貨幣さえあれば、見も知らない人々から貨幣の額に応じて財を購入し、サービスを受けることができる、大変便利な時代になりました。世界旅行して言葉が分からなくても貨幣さえあれば、豊かなサービスを受けることができます（もちろん、治安が安定しているという前提がありますが）。その貨幣を得るために、就職しなければならないのです。これは自明のことのように感じられます。

しかし、既に述べてきましたように、革命的技

術革新や国際分業等で、終身雇用のようなものは揺らいでいます。シャープ、東芝のような大企業ですら、将来の見通しが持てない時代ですから、22歳で就職し65歳まで働き続けることができるというモデルはもう成り立ちません。つまり、人生の中で失業、離職を体験すると考えたほうが良いのかもしれません。また、晩婚・未婚化、離婚、夫婦共稼ぎなど、家族形態は大きく変容しています。こうした「新しい社会」の中で生き続けるためには、どのような力、考え方を身につけるべきなのか、が問われています。人生において大学時代は、そうした変化の中でも揺らがない考え方、感性を身につけるべき時期でもあります。

3 別府大学の意義

佐藤義詮先生の“魅力”

別府大学を創設した佐藤義詮先生と私は生前お会いしたことはありません。現在、教鞭をとっている多くの教員もそうだと思います。ただ、私が働き始めたころ、佐藤義詮先生と共に教鞭をとってこられた先生方がおられ、直接学んだ卒業生が、本学事務職員としても多く働いていました。そうした方々から、佐藤義詮先生の思い出を聞くことが出来ました。

先生は、戦前、東京・お茶の水に開学された文化学院の１期生として学んでいます。この学校は各種学校で、多くの文人、芸術家が講師を務めておられたようです。与謝野晶子・鉄幹夫妻が学監をされ、ノーベル文学賞を受賞した川端康成も教えておられました。このように言いますと、“日本文化史に燦然と輝く講師陣”となりますが、それは今の見方でしょう。“末は博士か大臣か”といわれ、優秀な人々が軍人になった時代、こうした“文化人”は“不良”です。与謝野晶子は、“君、死に給うなかれ”などと詠い、“国賊”とも呼ばれました。こうした学校の１期生というのが驚きですね。佐藤義詮先生は、文化学院の教育に大きな影響を受けたようです。

先生は、文化学院に入学した大正14年に詩集「空気の心臓」を出しています。19歳の時です。そして、卒業の年、昭和３年に英文詩集「ホワイト・ナイト」を出版しています。また、帰郷し昭和11年に出版した学術書が「希臘古代詩序説」であることを思うと、先生はまず“詩人”であったと認識することが大切であると思います。

文学部だけの大学

別府大学は、長い間、文学部だけの単学部大学でした。高度成長期に多くの私立大学が生まれ、“駅弁大学”とも言われましたが、多くの大学が経済や工学等の実学系学部を創設する最中でも、別府大学は文学部だけを守り通してきました。私が就職したころ、佐藤先生の謦咳に接してきた、本学を卒業した事務職員の方から、「哲学をしないところは大学ではない、と先生は言われていた」と聞きました。この場合の「哲学」は「美学」と言っても良かったかもしれません。経営は苦しかったようですが、「高価なものよりも美しいものを」と常に言っていたという文化学院の創立者・西村伊作の薫陶を感じます。

「真理はわれらを自由にする」

別府大学は、「真理はわれらを自由にする」を校是としています。これは、国会図書館でも他の大学でも掲げられている言葉で、佐藤義詮先生が編み出した言葉では当然ありません。ただ、この校是を私たちはどのように理解すべきなのでしょうか。

学問は通説を批判することで発展しますが、これを汎用すれば、日常を疑い、より高次な知恵を得ようとする姿勢を身につけること、と言えます。新しい学習指導要領でも、これまでの知識偏重から課題発見・解決などを重んじる教育に舵を切るようです。その場合、アクティブ・ラーニングや共同学習などの手法を通して身につけるとのことですが、大学教育でも近年、同様のことが強調されてきました。学生教育において、狭い意味の学問手法というより、先ほど述べた学問姿勢が身に付くように指導すべきでしょう。

私が文化学院に感動するのは、権威・権力から自由であることです。もちろん、むやみに反権力、反権威を称賛しているのではありません。ただ、不安の増す時代、「長いものには巻かれろ」

という姿勢は、私たちの自由を奪うものです。

また、佐藤義詮先生を“詩人”という側面から見た場合、この校是は、芸術の価値、美しいものを求める心を表しているのでしょう。人間性の涵養は、狭い学問だけではなく、広い文化の脈絡の中でなされるという信念を感じます。

最近、地方に移住してくる若い人々を見ますと、芸術や工芸などを愛している人々が多いと感じています。別府にも現代芸術に取り組む、多くのアーティストが生活していますが、制作できる空間と発表できる場があれば、彼らは生き生きと生活しています。もちろん、生活のためにお金を稼ぐ必要はありますが、住む場所、日々の食事に必要な費用は驚くほど少なくて済むようです。お金を稼ぐために生きているのではなく、芸術を愛し、制作するために生きているのです。

佐藤義詮記念館の意義

世の中は、お金を得ることや社会での地位を得ることで成り立っていますが、「真理を求めること」は、こうしたものがなくても成立し、私たちに「自由」を与えます。この場合の、「自由」は孤立を意味するものではなく、「社会における絆」と「それを結ぼうとする主体性」を意味します。

別府大学の５か年計画が来年度から始まろうとしていますが、同時に、本学キャンパスに「佐藤義詮記念館」が建てられ、そこに先生の足跡を感ずることができるホールができますが、この意義は大変大きいと思います。つまり、こうした先生の精神を感じながら、様々なスキルを身につけ社会に出ていくことができる場、それが別府大学であるということなのでしょう。大学も、文学部と共に、食物栄養科学部、国際経営学部という現代社会に対応する学部が創設されましたが、両学部を含め、やはり、その土台に佐藤義詮先生の想いがあることを忘れてはならないでしょう。

おわりに

この４年間の公開講座で面白かったことは、多くの教員が自分の人生との関係で、研究や教育を語ったことです。研究を続けても、その後、安定した生活が待っているわけではありません。それでも研究したかったのは、やはり、知的好奇心が勝っていたのでしょう。そうした意味で、学生の皆さんに望むことは、公開講座で語られた様々な教師の中で、一人、二人の先生でもいいですから、是非、個人的に出会うことです。教師との出会いがなければ、授業に出て単位を一生懸命取得しても、「大学には入学していない」と思います。

別府大学は、「学生と教師の息遣いが共に感じることができる、小さな大学」であることが、数多くある大学の中で特筆されるものです。それは、創立者・佐藤義詮先生が学んだ文化学院の雰囲気を今に再現するものです。

参考文献

清原芳治（2008）、「浪漫はるかに－佐藤義詮の生涯」、大分合同新聞社

原真人（2017）、「AI時代　「好き」こそものの上手なれ」、朝日新聞　2017年１月10日朝刊

増田寛也・冨山和彦（2015）、「地方消滅　創生戦略編」、中央公論新社

レイ・カーツワイル、NHK出版編（2016）、「シンギュラリティは近い　人類が生命を超越する時［エッセンス版］」、HNK出版